

優しく強い子に！



<http://www.minamih.net/>
21・11・1(月)
南NEWS no 77

10月30日(土)は由井三小の運動会でした。矢上も朝から参観しました。各学年種目は徒競走と表現だけでしたが全員が一生懸命でした。それがグングン伝わってきました。



3年生 80M走

みんなが写っているわけではないのですが、南の子が在籍する学年の写真を撮りました。フィンランドの教育についての文章の合間に、運動会の写真を掲載します。(由井三小の2年・4年には南の子0です)

フィンランドに学ぶべきは『学力』なのか！

佐藤隆著 かもがわブックレット p21~23



1年生表現「Wになっておどろう」

「学力低下」や「勉強離れ」は、日本の学校を支配し続けてきた「競争の教育」が行き詰まり、勉強することが自分にどう役立つのかが見えにくくなっている状況とあいまって、これまでのようには「受験」などの競争刺激がはたらかない事態を背景にしています。その意味では、「競争の教育」に由来する「苦役としての学習」システムが崩壊する兆候であるとともに、これに代わるべき教育の内容と方法を、子どもたちが待ち望んでいることの表れであると理解すべきです。

そうだとすれば、「学ぶ」とはどういうことか、そして「学力」という言葉に託すべき内実とは何かを、子どもたちとともに、いまある現実の世界の中に描き直していく努力が、ますます重要かつ緊急なものとなってきているといえるのではないのでしょうか。

おそらく、その第一歩は、これまで私たち自身も知らず知らずにとらわれてきた「日本型高学力」の質的弱点を真正面に据えて問い直すことから始まるのだと思います。

「できないよりはできるほうがいい」からとして、「まずできるようにしてしまう」という発想が、多かれ少なかれ現在の学校を支配している雰囲気のもとでは、子どもたちは間違いを恐れ、わからないときには黙っているということを身につけてしまうに違いありません。そうではなくて、「わからないことを『わからない』と言える」、「間違ふことがみんなの役に立つと思える」そして「納得できるまで考えられる」ような、安心と自由な文化を、教室と授業の場面にどのように創り出していくかが、まずは問われているのだと思います。



5年生 100M走



3年生 表現

「Yui3チアダンス ハッピーズ」

第三に、このようにして、ひとりの「問い」がみんなの「問い」として共有されるような関係が生まれ、その意識が深められていけばいくほど、学習と学力を、単に個人の営みや「所有物」にとどめるのではなく、クラス全体の共有財産として捉える発想が豊かに生まれてくるはずで、そして、子どもたちがそれぞれの持ち味を發揮しながら、共通の課題に迫っていく努力と楽しさの経験は、社会の課題をそれぞれの能力をより合わせて解いていく「協働(共同)する」学力観や能力観を育てていくことにつながっていくに違いありません。



1年生 50M走

わたしたちが、守り抜くべきものと考えてきた戦後教育改革の中で生まれた47年教育基本法の前文にある「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造をめざす教育」も、このような学力観を前提としてはじめて成り立つのだと思います。



5年生 表現

「全力」「由井三ソーラン」

左から一人目・二人目は南の子



6年生 表現



「豊年太鼓 2021輝」

敬老席の方々が「鐘がいいね！」と褒めていました。運動会のフィナーレを飾り、盛り上げる「豊年太鼓」。今年も迫力満点でした！！感動！！！！！！

